

西行の釈教歌における自然と仏教的解釈

——法華經二十八品歌の「方便品」を中心に

羅 杰彬

西行（1118～1190）の『聞書集』に収められた「方便品」の歌、「あまのはら雲吹きはらふ風なくはいででややまむ山の端の月」（聞書集・2）は、自然現象としての「風」「月」「雲」を詠みつつ、それらが『法華經』の經文と重ねられている点が特徴的である。この歌は、それぞれの自然現象に仏教的意味を付与するだけでなく、一首全体の詠みぶりまでが仏教的な教義と結びついている点で異色を放っている。西行の釈教歌の詠法の特徴を、この歌を切り口に考えてみたい。

先行研究では、石原清志や山田昭全、宇津木言行、久保田淳などの論考が挙げられ、これらの研究者は歌の中で「雲吹きはらふ風」と「山の端の月」がそれぞれ何を象徴するのかについて様々な解釈を展開している。それを踏まえて、本発表では、釈教歌における「風」と「月」の歌を通じて、西行の「雲吹きはらふ風」と「山の端の月」の意味を検討し、「方便品」の歌意および西行の仏教思想を明らかにしたい。

具体的には、まず同じく「風」と「月」を詠んだ他の歌を考察し、これらの歌における「風」や「月」がそれぞれ何を象徴するのかを分析する。次に、「山の端の月」という表現に注目し、他の歌人や西行自身が詠んだ「山の端の月」の歌と比較することで、その象徴的意味を探る。また、西行の法華經二十八品歌における「月」を詠んだ歌（六首）を取り上げ、その中での「月」の意味を検討することによって、西行の「方便品」の歌における「山の端の月」の意味を解き明かす。さらに、「風」については、釈教歌における「風」の象徴的意味を分析し、西行がどのように解釈して詠んだのかを明らかにする。

これらの考察を通じて、西行歌の歌意を掘り下げ、仏教思想を自然現象として表現する際に西行がどのような工夫を凝らしたのか、また、深遠な仏教思想をあえて自然詠の形で表現する意図を解明することを目指す。

西行の釈教歌における自然と仏教的解釈

——法華經二十八品歌の「方便品」を中心に

千葉大学 羅 杰彬

はじめに

西行（一一一八―一九〇）は、自然の情景を通して仏教的な意味を表現した和歌を多く詠んでいる。その中でも「風」と「月」は、西行の和歌において繰り返し登場する重要な象徴であり、自然現象でありながらも、仏教的真理や悟りの境地を示唆する要素として機能している。本研究では、西行の法華經二十八品歌の「方便品」の歌を切り口に、西行の釈教歌における「風」と「月」の表現の特徴を明らかにすることを目的とする。

まず、取り上げる「方便品」の歌を掲げる。

方便品 諸仏世尊唯以一大事因縁故出現於世

あまのはら雲吹きはらふ風なくはいでややまむ山の端の月（西行・聞書集・2）

先行研究では、石原清志⁽¹⁾や山田昭全⁽²⁾、宇津木言行⁽³⁾、久保田淳⁽⁴⁾などの論考が挙げられ、これらの研究者は歌の中で「雲吹きはらふ風」と「山の端の月」がそれぞれ何を象徴するのかについて様々な解釈を展開している。それを踏まえて、本研究では、釈教歌における「風」と「月」の歌を通じて、西行の「雲吹きはらふ風」と「山の端の月」の意味を検討し、「方便品」の歌意および西行の仏教思想を明らかにしたい。

一、「山の端の月」の従来の詠み方と西行による新たな解釈

西行の和歌において、「山の端の月」は従来の釈教歌に見られる象徴的な意味を継承しつつ、さらに悟りの形成や西方浄土とのつながりを強調する新たな詠み方がなされている。従来の釈教歌では、「山の端の月」は釈尊や高僧の光輝を象徴し、衆生を導く存在として詠まれることが多かった。

性空上人のもとに、よみてつかはしける

くらきよりくらき道にぞ入りぬべき遥かに照らせ山の端の月

（和泉式部・後拾遺集・哀傷・1342）

寿量品 我時語衆生、常在此不滅、以方便力故、理有滅不滅

人めには世のうき雲にかくろへてなをすみわたる山の端の月

（藤原忠通・田多民知集・183）

寿量品 常在靈鷲山

末の世は雲のはるかにへだつとも照さざらめや山の端の月

（藤原俊成・長秋詠藻・466）

和泉式部の歌では、「山の端の月」は暗闇の中を進む者を照らす光として表現されている。ここでの「山の端の月」は、単に性空上人の象徴にとどまらず、迷いの道を進む衆生にとって進むべき方向を示す存在としての意味を持っている。忠通の歌では、世俗の苦しみや迷妄（雲）が月を覆い隠しても、その光はなおも澄み渡ると詠まれており、釈尊の智慧がどのような状況でも変わらず存在し続けることを示している。俊成の歌においても、時代が下るにつれ人々の迷妄が深まる（雲が月を隔てる）としても、釈尊の光は変わらず衆生を導くこと

が詠まれている⁽⁵⁾。

それに対して西行における「山の端」の「月」を見てみよう。

見月思西と云事を

山の端に隠るる月をながむればわれと心の西に入るかな（西行・山家集・870）

西行の歌は、従来の「山の端の月」の表現を受け継ぎながらも、特に悟りの形成や西方浄土への指向性と結びつけて詠まれている点に特徴がある。この歌では、沈みゆく月を見つめることで、心が自然と西方へ向かう様子が詠まれている。ここでの「山の端」の「月」は、単なる仏の光ではなく、悟りへの接近を象徴するものとして表現されている。

また、表現が類似している「聞はれて心の空にすむ月は西の山辺や近くなるらん」（山家集・876）という歌においても、山辺の月は、心の迷いが晴れるにつれて悟りへと近づくものとして詠まれている⁽⁶⁾。ここで詠まれる「月」は、単なる仏の象徴ではなく、修行によつて自らの心の中に現れる悟りそのものである。これにより、「山の端」の「月」は悟りの象徴としての側面を強調しつつ、自らの修行による心の変化とも結びつけられている。

このように、西行の「山の端」の「月」の表現は、従来の詠み方を踏まえながらも、悟りとの関わりをより強調する点に特徴がある。

二、「風」の釈教歌における役割と西行の風の詠み方

和歌における「風」もまた、多様な象徴性を帯びている。特に釈教歌の伝統では、「風」はしばしば仏法や悟りに関わる比喻として用いられる。その意味するところは文脈によって異なるが、大きく三つの側面が指摘できる。

第一に「仏法の広がり」としての風である。風が大気中に吹き回る様子から、仏の教えが世に広まり衆生を行き渡る様子を風に喩える表現がある。いわゆる「法風」という言葉があるように、風は仏法そのものの感化力・伝播力を象徴しうるのである。例えば、次の慈円の歌では、

広宣布布

法の花散らぬ宿こそなかりけれ驚の高嶺の山おろしの風（慈円・拾玉集・2522）

「法の花」が仏法の象徴であり、どの宿（場所）にも必ず仏法の影響が及んでいることを詠んでいる。「山おろしの風」は、仏法が広く世に伝わることを示している。

第二に「迷妄の除去」としての風である。これは風が雲を吹き払うイメージに基づき、無明の雲（煩惱や悩み）を吹き飛ばして真理の光を顕現させる働きとして風を捉える比喻である。

無量義経三首

身につきて燃ゆる思ひを消えましや涼しき風のあふがざりせば

（西行・山家集・1538）

この歌では、心の中で燃え続ける迷いや執着（「燃ゆる思ひ」）を、涼しい風が吹き払うことで静めるという表現になっている。ここでの風は、仏法の力が煩惱を取り除くことを象徴している。

第三にやや異色であるが、「迷妄そのもの」を風に喩える場合がある。例えば、人の心を惑わせ安定させない煩惱の働きを、吹きすさぶ風になぞえる表現である。

寿量品 如医善方便

風に悩むまぐずが原に朝日影のどけき方のたよりなりけり（慈円・拾玉集・2496）

この歌では、吹き荒れる風が「まぐずが原」（雑草が生い茂る荒れ地）を悩ませるように、煩惱によつて心がかき乱される様子を表現している。しかし、そこに差し込む朝日の光（仏の智慧）が、心を静め、悟りへ導く希望となることが示されている。

つまり、釈教歌における「風」は、仏法を伝えるものとも、煩惱や迷いを払うものとも、煩惱そのものともなりうる、多義的な象徴的意味を有している。

ところが、西行の和歌表現を詳しく見ると、「風」の担う意味にはある独自の偏りがあることがわかる。それは、風が一貫して仏法の力として肯定的に描かれている点である。「風」迷妄そのもの」という否定的な用法が他の釈教歌に見られるのに対し、西行の和歌ではほとんど採用していない。むしろ風は「仏のはたらき」を示すもの、すなわち衆生の迷いを晴らし悟りへ導く積極的な力として登場する。

三、「風」と「月」の象徴的意味とその組み合わせ

西行をはじめとする釈教歌の詠み手は、「風」と「月」を独立した象徴としてだけではなく、それらの相互作用にも注目し、そこから悟りの形成過程を表現している。

風と月の関係には、大きく二つのパターンがある。第一のパターンでは、風が雲を吹き払うことで月が現れる。この場合、「風」は仏法の力を象徴し、「雲」は迷い、「月」は悟りの象徴として機能する。仏や菩薩の力によつて衆生の迷妄が取り除かれ、智慧の光が明らかになるという考え方がここに表れている。

神力品の心を

大空をみのりの風やはらふらん雲かくれにし月を見るかな

（源俊頼・散木奇歌集・872）

この歌では、「みのりの風（仏法の風）」が雲を払うことで、隠れていた月（悟りの光）が現れる様子が詠まれている。この場合、風は仏法の教えそのものであり、月が雲間から姿を現すという視覚的な情景を通じて、仏の教えが迷妄を除き、悟りを顕現させるという思想を伝えている。

これに対し、第二のパターンでは、「月」が澄み渡ることによつて雲が自然に消え、風が吹くという順序が取られる。ここでは、「風」はもはや迷妄を払う力ではなく、悟りの境地が達成された後に吹く清涼な風として機能する。この場合、悟りは外的な力によつてもたらされるのではなく、修行者自身の努力によつて心が清められることで自然に開かれるものである。明恵の次の歌はこのパターンの典型である。

禅堂へ行く時、曇りたる月、出観の後雲間より出でて、松風にたぐひてわりなきに

心月のすむに無明の雲はれて解脱の門に松風ぞ吹く（明恵・明恵上人集・88）

「心月が澄む」とは、修行を通じて心が清浄になり、悟りの光が明確になることを意味する。そして、その結果として「無明の雲（迷妄）」が晴れ、解脱の門が開かれる。ここでの

「松風」は、悟りの境地における静けさや安らぎを象徴し、悟りの完成が風の吹く情景によつて示されている（一）。

この二つのパターンの違いは、「風」が悟りに至る過程でどのように機能するかによって区別される。第一のパターンでは、風が積極的に迷いを吹き払う役割を持ち、悟りは仏の導きによってもたらされる。他力的な救済の側面が強調され、仏菩薩の慈悲によって衆生が悟りへと導かれる過程を表している。一方、第二のパターンでは、修行者の心そのものが清らかになることで悟りが開かれ、その結果として風が吹く。この場合、風は悟りの証しであり、悟りの完成を表すものとして詠まれる。

しかし、両者には共通点もある。それは、「月」が常に悟りを象徴し、「雲」が迷妄を表し、「風」が仏法の働きを担っている点である。違いは、風が悟りを開くための手段として作用するか、悟りの証しとして存在するかの違いにすぎない。どちらのパターンにおいても、「風」と「月」の関係は悟りへの道程を表現し、仏教的な真理を伝える役割を果たしている。

おわりに

西行の方便品の和歌は、従来の釈教歌と異なり、単に静的な情景を描くのではなく、「風」「雲」「月」という自然の要素を組み合わせることで、仏法の働きを動的に表現している。この構造は、『法華経』『方便品』の「諸仏世尊唯以一大事因縁故出現於世」という教えを視覚的に示すものであり、単なる自然描写を超え仏法的作用を具体化する試みといえる。

この和歌において、「風」は仏法の力を、「雲」は衆生の迷妄を、「月」は悟りや智慧を象徴する。それらが相互に関係し、「風が吹くことで雲が払われ、隠れていた月が姿を現す」という流れが生まれる。これは、「仏法が迷妄を取り除き、衆生を悟りへ導く」過程を象徴するものであり、西行の歌の大きな特徴である。

特に、「山の端の月」の意象が、従来の釈尊や僧侶の象徴という枠組みを超え、衆生の悟りの形成として再解釈されている点が注目される。西行の方便品の歌では、悟りは単に与えられるものではなく、「風」によって「雲」が取り払われることで「月」が輝くように、仏法の力によって迷いが晴れ、悟りの境地が開かれるプロセスとして描かれている。このように、西行の和歌では、仏法の働きが単なる理論ではなく、具体的な自然の変化として表現され、悟りへの道が直感的に示されている。

このように、西行の方便品の歌は、従来の象徴表現を踏まえつつ、仏法の働きを自然の変化の中に組み込み、悟りの形成を動的に描いた点に独自性がある。風・雲・月の相互作用を通じて、仏法の力が具体的に可視化され、衆生が悟りへと至る過程が詩的に表現されているのである。

注

- (1) 石原清志『釈教歌の研究』同朋舎、一九八〇年
- (2) 山田昭全『西行の和歌と仏教』明治書院、一九八七年
- (3) 宇津木言行『聞書集考論 西行家集の脱領域研究』花鳥社、二〇二四年
- (4) 久保田淳・吉野朋美校注『西行全歌集』岩波書店、二〇一三年
- (5) 『長秋詠藻全評釈 下巻』武蔵野書院、二〇一八年
- (6) 西澤美仁・宇津木言行・久保田淳『山家集・聞書集・残集』明治書院、二〇〇八年
- (7) 平野多恵・谷知子『秋篠月清集・明恵上人歌集』明治書院、二〇一三年